

# 坊津からブラジルへの移住と交流

田島 康弘

(1997年10月15日 受理)

## 第I章 研究目的

鹿児島県川辺郡坊津町は「ブラジルに一番近い町」<sup>1)</sup>と呼ばれる。戦前、多くの人々が坊津からブラジルへ渡っており、近年も、こうした人々とこちらとの交流がますます活発に行われていて、両者の間に太い紐が作られてきている。

本研究は、こうした状況をもたらすに至った事実、すなわち、戦前のブラジル移住の経過とその後の生活確立の過程、及び近年の交流活発化の実態について、既存の諸資料や聞き取りに基づいて、できるだけ明らかにするように努め、こうした事実が私達に訴え、問いかけていることについて考えてみようとするものである。

筆者は昨年、奄美とブラジルとの関係について考察した<sup>2)</sup>が、鹿児島県内における最大のブラジル移民の輩出地は南薩地方であり、その中でも坊津町が人数では最も多い。そこで今回はこの坊津町を対象として取り上げ、ブラジルとの関係について考察するものである。「国際化」の時代と言われて久しい今日、日本人の「国際化」が最も進んだ例が、ブラジル移民のケースであるとの主張が齊藤広志<sup>3)</sup>によってなされている。氏の言うように「日本人の国際化」の問題を考える上でも、ブラジル移民のケースを抜きにすることはできないであろう。

移住や交流の実態をより明らかにするため1997年7月16日から20日まで学生とともに合宿形式による現地調査を行い、全体で14人の方々から、本人や家族さらには親戚の移住の経過とその後の生活、及び近年の交流の実態について話を聞くことができた<sup>4)</sup>。

これ以外にも、この前後に数回の現地での予備および補足の調査を行っている<sup>5)</sup>。

また、地理学的な研究として、整理や表現の際に、「空間視点」<sup>6)</sup>についてもできるだけ配慮するつもりである。

## 第II章 坊津からブラジルへの移住と生活

### 第1節 移住の背景と経過

#### 1. 背景

南薩、とりわけ坊津でブラジルへの移民が多かったのはなぜか。これについて「坊津町郷土誌」は次のような理由をあげている。

「第1に、台風の常襲地帯でその度に生活がおびやかされ、国、県の補助とか、災害救助法とかの手だてがなかった。

第2に、漁船が台風により沈没、破損しても、直ちに代船を造る資力がなかった。漁業制度が確立されていない時代で、漁家は失職する者が多かった。

第3に、移住者の中には、当時の中等教育を受けたインテリ層も相当いるので、これは坊津の伝統的な開拓精神が原動力となっているものであろう。」<sup>7)</sup>

すなわち①台風被害、②代船建造の資力不足、③伝統的開拓精神の3つをあげている。

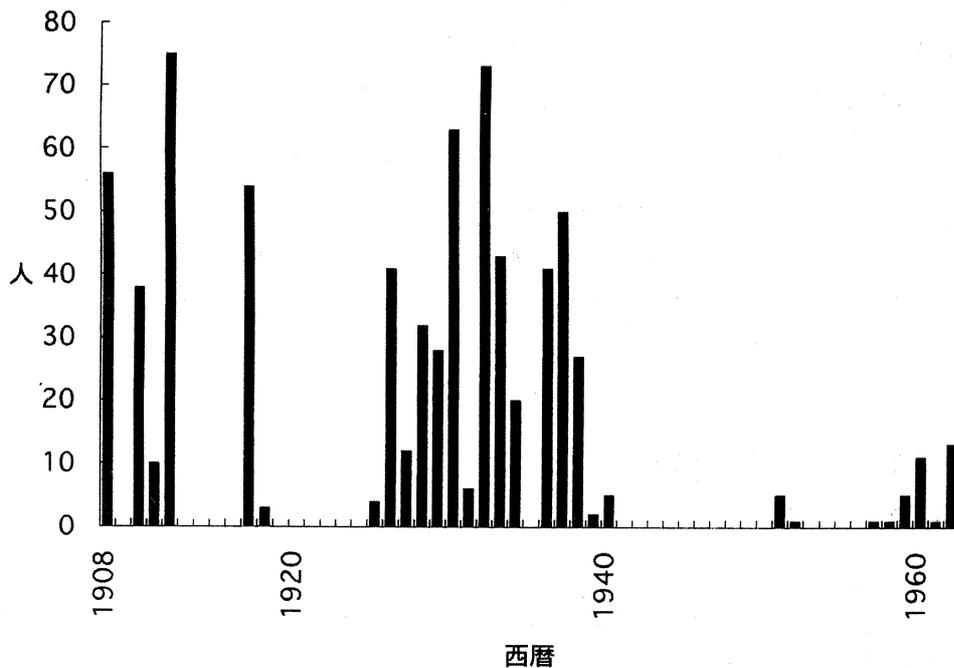
しかし、①や②の根底には「天に連なる段畑」を耕地とする農業経営の零細性及び鯉漁業の危険性や不安定性があり、ひと度台風被害を受けるとなかなかそれから立ち直れない状況があったと言えよう。そしてこの台風も頻繁に襲来し、とくに1905年(明治38年)の台風による被害が1908年に始まる初期の移民の直接の契機となったと言われる。<sup>8)</sup>

## 2. 移住の経過

当時の移住は神戸から船で2カ月程を要し、サントスから各地のコーヒー園に配耕され、数年の契約労働の義務農年を終えたのち、次第に独立の道をたどったことなどが知られている。本稿では既存の諸資料を基に多少異なる側面からこの経過を明らかにしたい。

第1図は戦前及び戦後における坊津町<sup>9)</sup>からブラジルへ渡航した人の年次別変化を示したものである。

戦前の数値は、元在伯鹿児島県人会長池田重二著『躍進』に記載されている戦前ブラジル移住者



第1図 坊津町からブラジルへの渡航者の推移

資料：池田重二(1941)：『躍進』

鹿児島県海外協会(1965)：『鹿児島県海外移住者名簿』

送出名簿5326名<sup>10)</sup>の中から坊津出身者のみを拾い出し、集計して得られたものであり、戦後のそれは鹿児島県海外協会編集兼発行による『鹿児島県海外移住者名簿』<sup>11)</sup>の戦後渡航者3040名の中の坊津出身者を年次別に集計して得られたものである。

この図から、坊津からブラジルへの移住者が多かった時期として4つの時期を指摘することができるであろう。

第1期は1910年前後（明治末）の時期であり、第2期は1910年代後半（大正）の時期で、第3期は1920年代後半～1940年まで（昭和初期）、第4期が戦後である。

まず、戦後は、戦前と比べて5%程度にすぎず、大部分が戦前に移住していることがわかる（第1表）。<sup>12)</sup>

次に全体の62%が第Ⅲ期に移住しており、坊津からブラジルへの移住者は、この時期すなわち昭和初期に最も多かったことがわかる。

次に、各時期の数値について、もう少し詳しくみよう。

まず、一世帯当りの世帯員数をみると、全体では3人世帯だけで過半数を占め、4人世帯を加えると7割近くを占める（第2表）。3人が多い理由は、移住が世帯単位で行なわれ、しかも1世帯内に稼働可能労働力（12才以上）3人以上を含むことが必要条件とされていたためである。

それにしても、3人だけの世帯が多いということは、本当の家族ではなくいわゆる「構成家族」

第1表 時期別移住者数

時 期	西 暦	総 人 数	割 合
I	1908～1912年	179人	24.8%
II	1917～1918	57	7.9
III	1925～1940	447	62.0
IV	1951～1962	38	5.3
計		721	100.0

第2表 渡航時における1世帯当り世帯員数

世 帯 員 数	I	II	III	IV	計	割 合
1人	4	1	30	4	39	
2	1			4	5	3.0%
3	38	17	30		85	50.6
4	12		17	2	31	18.5
5	2		11	2	16	9.5
6			11		11	6.5
7			10	1	11	6.5
8			9		9	5.4
計(1人を除く)	53	18	88	9	168	100.0

第3表 渡航時における移住世帯主の年齢

年 齢	I	II	III	IV	計	割 合
15-19才	5	2	7		14	8.3%
20-24	22	10	22	1	55	32.7
25-29	14	4	20	4	42	25.0
30-34	7	2	16	2	27	16.1
35-39	5		13	1	19	11.3
40-44			7	1	8	4.8
45-49			3		3	1.8
計	53	18	88	9	168	100.0

すなわち上記の条件を満たすために一時的に作り上げられた「家族」がかなりあったことの反映であろう。「夫婦」の場合でも名簿上だけの夫婦である場合さえあったのである。

次に、世帯員数を各期別にみるとⅠ期とⅡ期は3人世帯が極めて多いのに対し、Ⅲ期は4人～8人の世帯も3人世帯の2倍近くに達する。Ⅰ、Ⅱ期が「構成家族」を比較的多く含んでいたのに対し、Ⅲ期は、本来の家族がそのまま移住したことの反映かと思われる。

また、「1人」のケースも多いが、ここには先発移住世帯による「呼び寄せ」の移住者が多く含まれている。

次に移住者の出航当時の年齢について整理してみると、全体では20代以下が66%を占め、30代が27%、40代が7%となっていて若い年齢層が中心であった(第3表)。

これを時期別にみると、やはり、Ⅰ、Ⅱ期は20代以下が特に多く、40代は皆無であるのに対しⅢ期では30代、40代も相対的に多くなってきている。

以下を整理すると次のようになろう。

- 1) 坊津からブラジルへの移住者は1925～40年の「昭和初期」に最も多かった。
- 2) 初期の1910年頃及び1910年代には、20代を中心とする世帯員3人の世帯が多く、いわゆる「構成家族」もかなり見られたが、「昭和初期」になると30～40代の世帯主も一定数含まれるようになり、従って世帯員数(すなわち子供)の多い一般の世帯の移住が多くなってきた。
- 3) またⅢ期には単身者の移住すなわち「呼び寄せ」もかなり見られた。<sup>13)</sup>

## 第2節 移住後の生活の変化

本節では、即存の諸資料に基づき、移住者のその後の生活の変化についてみよう。

まず、資料について見ておくと、主な資料は2つである。1つは、先に戦後の移住者数で使った『鹿児島県海外移住者名簿』である。本書に掲載されている事実は、1962年に企画され1965年3月発行となっているので1962年～64年頃のこと、すなわち1960年代前半のものであると推測できる。

本書は戦前渡航者の部分と戦後渡航者の部分とに別れており、この両者の形式が異なっている。

すなわち、戦前渡航者の部分はまず行先国別、次いで各国の内部はアルファベット順で整理されているのに対し、戦後の部分は合衆国のカリフォルニアに移住した難民救済法関係移住者以外は戦後移住者としてまとめられ、その中ではまずは市町村別に整理され、各市町村の内部は渡航期の順に整理されている。総人数では戦前が12097名、戦後が3040名、合計15137名の掲載である。

筆者はこのうち戦前移住者の資料から、まず行先国でブラジルを選び、その中から出身地が坊津町である者（世帯）のみを選び出して整理した<sup>14)</sup>。その総数は152世帯であった。

もう一つの資料は1979年に発行された白石蜜義著「在伯鹿児島県人発展史」である<sup>15)</sup>。

本書の事実は1977年9月から1979年8月との記載があるので、この間に収集されたものであろう。

本書は1世帯毎に写真の入った詳しい記述のある部分（総数573世帯）と、名簿のみの297世帯、合計870世帯の鹿児島県出身者の資料があり、写真入りで掲載された世帯に関してはかなり詳しいが、出身者の全体を網羅しているものではない。筆者は本書の573世帯中から坊津町出身者のみを拾い出して整理した。その総数は82世帯であった。<sup>16)</sup>

整理の際に取り上げた項目は主に各時期の職業と居住地の2つである。

## 1. 職業の特色とその変化について

まず、職業について取り上げよう。

各時期の職業について整理した結果が第4表と第5表である。

まず、ブラジル移住者はほとんどの者が、コーヒー農園の契約労働者として移住したので、入植当初は農業労働者であったことになるが、入植後、平均して約30年あるいはそれ以上後の1960年代前半の職業（第4表）をみると、次のようなことが言えよう。

- 1) 農業関係者が6割程度を占めて最も多い。しかし、この内容は自立的経営に変わっている。
- 2) 農業以外の職業でとくに第3次産業分野の仕事を行なっている者が3割程存在する。
- 3) 第3次産業の中で多いのは、農産物の流通面での仕事とともに、店を開いて各種の営業を行う自営業的な仕事である。

また、勤務的なものも生まれて多様化の傾向が見られる。

次に、さらにこの約15年後である1970年代後半の職業の結果を整理した第5表からは、以下のようなことが言えよう。

- 1) 農業関係者の比率がさらに低下し半数以下となった。と同時に、農業の内容面でも、ぶどう、花卉など新しい面が生まれてきている。
- 2) 第3次産業の比率が、さらに高まっており、特に、農産物の流通面での仕事の比率が高くなっている。
- 3) 自営業的経営の内容がさらに多様化してきており、開業医なども生まれてきている。

また、勤務的な仕事の比率も高くなっている。

第4表 60年代前半の職業

職業	世帯数	計	割合
第1次産業関係			
農業	88		
漁業	2	91	63.2%
牧場	1		
第2次産業関係			
大工・建設業	3		
レンガ工場経営	2		
職工・技工士	2	9	6.3
菓子製造・販売	1		
洋服仕立業	1		
第3次産業関係			
流通的			
野菜・果物販売	8		
商移動巡回市場	6	17	11.8
移動巡回市場	3		
自営業的			
パール経営 <sup>1)</sup>	5		
洗濯業	4		
タクシー業・運転手	3		
運送業	3		
雑貨店	2	22	15.3
食料品店	1		
肥料販売店	1		
理髪店	1		
バス会社経営	1		
自動車修理工場	1		
勤務的			
大学教員	1		
官吏	1		
コチア産業組合勤務	1	5	3.5
土地会社勤務	1		
寄宿舎管理人	1		
計	144	144	100.0
無職	7	7	
不明	1	1	
総計	152	152	

注1) 本文注22) を参照

第5表 70年代後半の職業

職業	世帯数	計	割合
第1次産業関係			
野菜栽培	13		
養鶏業	9		
バタタ栽培 <sup>1)</sup>	8	37	48.1%
雑作・複合経営	4		
イタリアブドウ栽培	2		
花卉	1		
第2次産業関係			
建設業	3	3	3.9
第3次産業関係			
流通的			
バタタ等委託販売	9		
フェイランテ <sup>2)</sup>	8		
メルカード経営 <sup>3)</sup>	2	21	27.3
野菜類の行商	1		
鶏卵販売	1		
自営業的			
食品・雑貨店	3		
開業医	2		
写真業	1		
洗濯業	1	11	14.3
不動産業	1		
精米所経営	1		
タクシー業	1		
バス会社・製材所経営	1		
勤務的			
会社勤務	3		
中央市場勤務	1	5	6.5
コチア産業組合勤務	1		
計	77	77	100.0
不明	5	5	
総計	82	82	

注1) ジャガイモの栽培

注2) 露天市での販売人

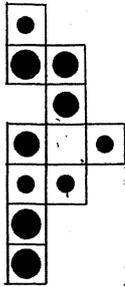
注3) 市場での常設店経営者

以上のことから、農業から商業・サービスを主とする様々な面に職業が多様化しており、また、農業内部での流通面への傾向や農業経営の多様化、商業・サービス業内部での一層の多様化が進んでいると言えよう。

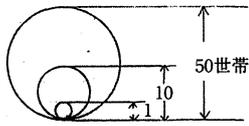
ちなみに、70年代後半の82人の世帯主のうち1世は50人(61%)で2世が32人(39%)を占めている。世代交代とともに以上の傾向は、ますます促進されることが予想されよう。

サンパウロ市から

500~ 400~ 300~  
600km 500km 400km



凡例



パラナ州



マットグロッセ・ド・スール州



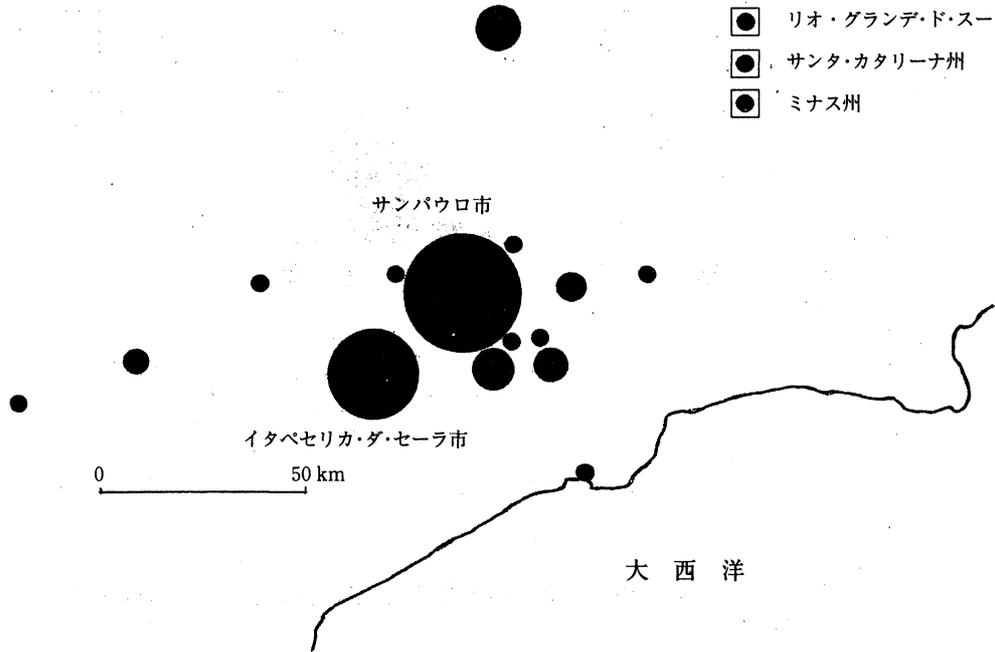
リオ・グランデ・ド・スール州



サンタ・カタリーナ州



ミナス州



第2図 1960年代前半における坊津町出身者の居住地

注) 左上の世帯群は、距離は図上の位置より遠方にあるが、サンパウロ市からの方位についてはほぼ正確である。

## 2. 居住地

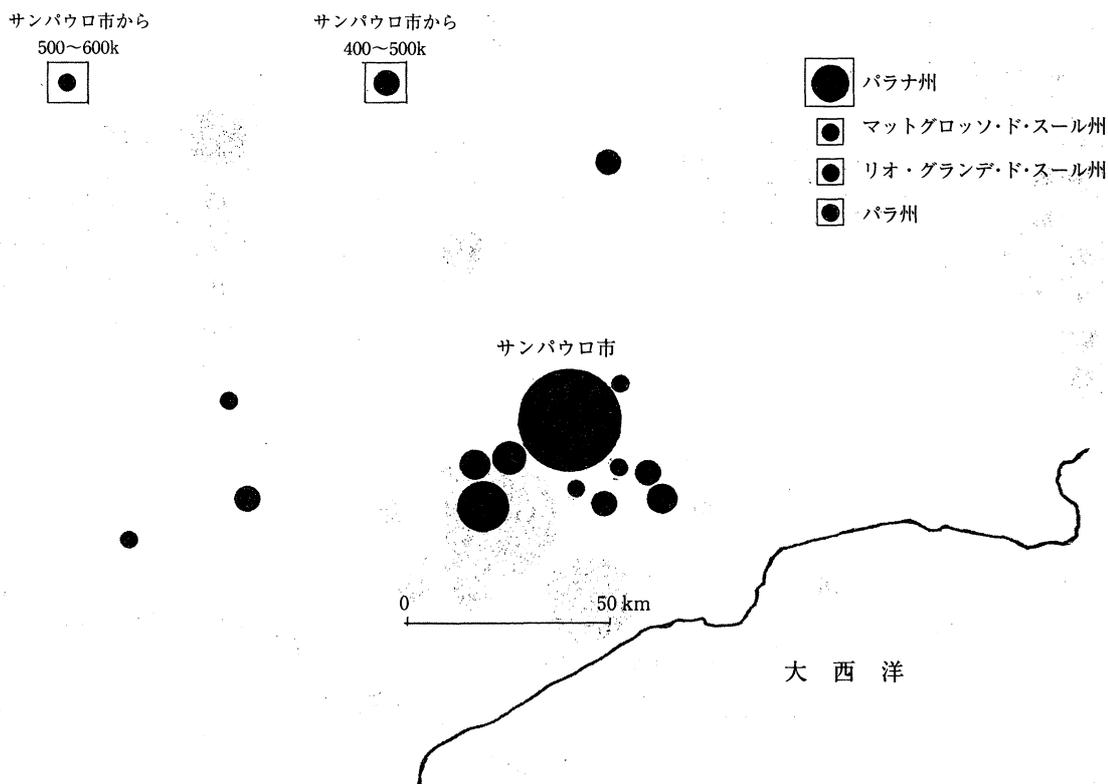
日本人移民の入植当初のコーヒー園での契約労働は、モジアナ線やパウリスタ線方面が中心で、これらはサンパウロ市の北方ないし北北西の地方であり、その契約労働期間を終えて、自立農をめざして入植した開拓地はノリエステ線、ソロカバナ線という北西ないし西北西の地方であったことが半田知雄などによって指摘されている<sup>17)</sup>。

第2図の西北西（左上）の地域は、この開拓地に相当するものであろう。

入植後平均して30年後の1960年代前半、坊津出身者も、少なくとも19世帯がこの地方に居住していた。

しかし、坊津出身者の最大の居住地はサンパウロ市であり、次いでその南西郊外（約31km）のイタペセリカ・ダ・セーラ市であった。

サンパウロ市郊外の中でもとくにこのイタペセリカ・ダ・セーラ市に集住したことが、坊津出身者の特徴であり、このことは、調査の際の聞き取りによっても明らかである。坊津出身者は、この地に多く集まり、日本人学校も建てて、日本語教育を行い、後には、坊津町からの訪問団などの歓迎会なども、この学校で行われている。



第3図 1970年代後半における坊津町出身者の居住地

また、この図では明らかではないがサンパウロ市内でも、南西部のサント・アマーロ地区に坊津出身者が多かったことが、資料から明らかであり、結局市内のサント・アマーロ地区及び、郊外のイタペセリカ・ダ・セーラ市の2地区に、坊津出身者が多かったと言える。

次に1970年代後半の居住地（第3図）を見ると、この間の変化は、以下のように述べることができよう。

- 1) 西北西の開拓地の居住者が減少したこと。
- 2) イタペセリカ・ダ・セーラ市の集住度も低下していること。
- 3) サンパウロ市への集住度が、相対的にずっと高まったこと。

先に職業の面で農業の比重の低下と、第3次産業の比重の増大を見たが、サンパウロ市への居住地の集中も、こうした傾向と軌を一にするものと言えよう。

なお、時期はさかのぼるが「町報ぼうのつ」<sup>18)</sup>の1967年8月号にブラジル在住の日高小平氏からの手紙の紹介があり、そこには次のような記述がある。

「わが坊津出身者も、戦前はサンパウロ市郊外に集団して住んでいましたが、戦後はそれぞれ土地を購入して農園にまた市内に進出し、商業・工業に分散して広範な分散状態で、連絡もなかなか容易ではありません」。

この文章の集団で住んでいた郊外は、イタベセリカ・ダ・セーラ市やサント・アマール地区であろう。また、その後の分散とは、1つはサンパウロ市への、もう1つはサンパウロ郊外農村への分散であろうことが予測され、こうした傾向は上述の筆者の分析に基本的に沿うものと考えてよいだろう。

### 第三章 坊津町とブラジルとの“国際交流”

#### 第1節 交流の経過

坊津からブラジルへの渡航者総数は、戦前だけで683人、戦後も加えると721人に達することを先に見た。(第1表)

その後、年の経過とともに2世、さらに3世が誕生し、坊津をルーツに持つ人々の数も増えてくる。

これらの人々は、坊津に親戚をもつだけでなく、親や兄弟さらには子供まで坊津に住んでいるという場合もあった。すなわち、家族が別々に居住する場合さえあったのである。

こうした人々が、いかに遠く離れていても互いに交流しようとするのはごく当然であるが、こうした交流が実現されるのは、かなりの年月が経った後のことであった。

ここで、両者の交流の経過を、「町報ほうのつ」に記載されている限りで整理してみた。(第6表)。この表から、以下のことが指摘できよう。

第6表 交流の変遷

西暦(年)	ブラジルから日本へ				日本からブラジルへ	
	便り	送金 返金	一時 帰国	集団 訪町	個人 訪伯	集団 訪伯
1953~54 55~59	2	1				
60~64 65~69	1 1	2	2 3			
70~74 75~79	1 4	4 3	5 8	1 (11)	1 2	
80~84 85~89	1 2	1		2 ( $\frac{14}{15}$ )	1 1	1 (11) 1 (10)
90~94 95~	3		3 2	1 (53)		1 (14)
計	15	11	23	4 (93)	5 <sup>2)</sup>	3 (35) <sup>3)</sup>

注1) 数字は件数、ただし( )内は人数。

2) 町長、「ブラジルふるさと会」会長など。

3) 町報では、各回の訪問団員募集、出発、帰国報告などが分かれて掲載されているが、ここではこれらをまとめて1件とした。

資料：町報ほうのつ (1953~1997)

- 1) まず、人の交流をみると、ブラジルからの日本への訪問は1960年代に始まり、70年代にかなり多くなったのに対し、日本からブラジルへの人の移動は、これより10年ほど遅れて、町長などの特定の個人が渡伯するようになったことがわかる。集团的交流についてもほぼ同様で、ブラジルからは70年代前半が最初であるのに対し、日本からの集団での渡伯は80年代前半が最初である。また、集団移動の日数や人数の点でも、ブラジルから日本への方が日本からブラジルへよりも多い。

以上のことは、ブラジル側からの日本への気持ちの方が、その逆よりも強いことを意味しているのではないだろうか。

- 2) 次に、ブラジルからの便りについては、70年代にやや多い傾向はあるものの、50年代から90年代の現在まで、比較的平均していると言えるように思われる。
- 3) また、ブラジルからの送金、送品についてみると、50年代の早い時期にこれが行なわれたこと、そしてやはり70年代に多かったことなどが特徴である。

以上の考察からすると、坊津町とブラジルとの交流は必ずしも同レベルではなく、ブラジルの側の方がよりテンションが高いというか、より積極的に行なってきたと言えるように思われるのであるが、どうであろうか。

ただ、こうしたブラジルの側のテンションの高さを保っている背景に、町が定期的に送っている町報などが果たしている役割も大きいことを忘れてはならないだろう。

## 第2節 聴き取りによる“交流”の具体例

次に、聴き取りにより明らかとなった交流のいくつかの具体例を示そう。

### 1) N. H. 氏

氏の家族は1930年(昭和5年)、氏が3才のとき父母及びおじの4人で渡伯、父はカツオ船に乗っていたが不漁で、日本に見きりをつけたのだという。

ブラジルでは、契約労働のコーヒー園ではなく、同郷の先発移民であったT氏の下で3年間働き独立した。戦前はイタペセリカ・ダ・セーラのT氏の居住地近くの山を開墾し、ここで15年程生活したが、戦後は、サンパウロ西方150kmの郊外にあるピラール・ド・スールに30アルケール(約70町歩)の土地を購入し、今日では200アルケールにまで拡張している。

ところで、本人自身は、この間の1935年(昭和10年)8才のときに、おじと一緒に帰国した。これは父親の意思で、日本の教育を受けさせることが本人のためであると考えたからだという。氏はその後ずっと日本で生活し、次の渡伯は、結局1987年氏が60才のときであった。このとき93才の母が健在で、実に52年ぶりの再会であった。なお、氏は1994年にも3たび渡伯し兄弟に面会している。

氏は9人兄弟で、氏以外の8人は皆ブラジルに居住している。

ピラール・ド・スールでは5男・6男・7男が父親のあとを継いで農業を行っており、5男は

ニンジン、タマネギ、トウモロコシ、6男はジャガイモ、7男は果樹をそれぞれ中心に互いに協力しあっている。

なお、2男、3男、4男、長女はそれぞれ結婚して独立し、このうち、4男は鉄工所を営んでいる。

## 2) O. T. 氏

彼女は1936年（昭和11年）、ブラジルで生まれた。両親はコーヒー園での契約労働者として入植し、サンパウロ市北方110kmのカンピーナス市や、西方50kmのモジ・ダス・クルーゼス市周辺で農業をしていた。彼女自身は5才のとき坊津出身の養父母とともに帰国したが、その理由は当時は仕事が大変で「星を見ながら早朝仕事に出て、星を見ながら夜帰る」ような生活だったからであった。日本への到着は1941年（昭和16年）12月で、太平洋戦争の開戦時であり、彼女の乗った船は「白旗をあげて帰ってきた」と言う。

その後、1988年（昭和63年）、熊本在住時に在伯熊本県人会の行事<sup>19)</sup>の件で渡伯し、およそ50年ぶりに81才になる母親と再会した。父親はすでに他界していたが、長男がその後を継ぎ、サンパウロ西方100kmのピエダーデで現地人を雇って、ジャガイモ、キャベツ、などを主とする農業を行なっている。また、夫の故郷坊津へ帰ってきていた1994年（平成6年）には、在伯鹿児島県人会の行事<sup>20)</sup>で再度渡伯している。

彼女は8人兄弟の5番目、3女であるが、在伯の他の兄弟はそれぞれ、大学教授、日系企業社員、学校の教師、薬局経営、木材店経営など様々な仕事についている。

これらの兄弟たちは仕事や観光でちょくちょく日本に来たことがあるそうで、さらに3世の甥や姪も夏休みなどに学費稼ぎに日本に来る者もいるという。また、兄弟たちは日本語が話せるが、3世は基本的には無理のようで、日本に来るために日本語を勉強しているともいう。

最後に、彼女の感じたブラジルの国民性は、のんびりしておおらかだということであり、また、ブラジルは湿度が低くて気候がよく、住みやすいという<sup>21)</sup>。

## 3) M. N. 氏

彼女の両親は1912年（明治45年）、神奈川丸で渡伯、奥地での生活はジャガイモの栽培で、畑も広く「夜も真っ暗になるまで一日中働いた」が、「砂糖も思うように食べられなかった」という。こうした中で、1929年彼女が4才のとき、彼女自身は日本に帰国し、祖母と生活することとなった。両親の方は、その後サンパウロに移り、それからは次第に生活がよくなったと言う。

子供の頃は、両親が日本にいなかったため、父兄会や雨の日などさみしい思いをした。

その後彼女が17才であった1938年と大阪で働いていた1952年に、父から渡伯を進める誘いや「呼び寄せ」の手紙が来たが、養父母の方が良かったり、長く離れていたりしたため、行く気になれなかったという。

彼女には3人の弟と4人の妹が、誕生していた。長男は現地人と結婚して家を出たが、2男が野菜販売の仕事で家を継ぎ、3男も2男に協力して働いている。

2女の夫は坊津出身であり、またパール経営<sup>22)</sup>をしている3女の夫も枕崎出身で、度々来日して交流がある。美容師の4女も日本に働きに来て、現在も神奈川県に居住している。さらに4女の息子も何度か来日し、金をためてブラジルで家を建てたそうである。

両親は既になくなったが、以上のように兄弟たちが度々訪日し、彼らやその子供たちとの交流は活発である。

以上の3氏の場合は、いずれも子供の頃に、両親や兄弟から離れて帰国したケースであって、今回の我々の調査の中で、最も厳しい現実を知らされたものであった。

これらの事実は、時代や歴史に規定されて存在する社会やそこに生きる人間について、深く考えさせるものがある。

次に、被調査者の家族ではないが、おじ、おば、いとこなど親戚関係にある者との交流のケースをみよう。

#### 4) S. T. 氏<sup>23)</sup>

氏の場合、交流の主な相手は家族ではなく、いとこ (S. Y. 氏) とその関係者たちである。このいとこは、現在、出稼ぎで浜松に来ており、年2回ほど坊津へも来る。

このいとこの S. Y. 氏は、ブラジル生まれで、1936年、氏が8才のとき帰国し日本で育ち、1960年、戦後の移民として渡伯した人で、サンパウロ東方37kmにあるスザノ市で「外人」<sup>24)</sup> 2人を雇い、野菜の生産・販売を行う農業をしている。

S. Y. 氏は、日本での海軍への入隊や、大工・専売公社の勤務などの仕事の経験があり、国籍も日本籍で、今回以前にも、渡伯から10年後の1970年、また1973年、1990年にも日本に来ている。医学方面に進んだ氏の長男も1987年、3カ月ほど東京に滞在した時に坊津にも20日間程滞在し、また、ブラジル日本電気に就職した2男も、ほぼ毎年のように日本(東京)に来ていて、坊津にも立ち寄っていた。この2男は現在は父のあとを継いで農業をしている。

このほか、日本へ出稼ぎに来る S. Y. 氏の親戚や知人も少なくない。

以上のように、日本の S. T. 氏とブラジルの S. Y. 氏との結び付きを軸にして、様々な交流が見られている。被調査者の S. T. 氏の奥さんによれば、私達は「S家の交流を大切にしている」ということになる。

#### 5) A. F. 氏

彼女の母は4女で、長女と二女はブラジルへ、3女はカナダへそれぞれ移住している。長女と二

女すなわち彼女のおばたちが渡伯したのは1928年で、現在は2人とも他界したがその子供たち、すなわち彼女のいとこ達との交流が続いている。

長女の長男夫妻は1987年と1995年に墓参りに訪日しており、タクシーの運転手をしている2男も、1990年頃愛知県の名古屋を中心に出稼ぎに来ていて、その後も日伯間を往来している。長男は既に70才と高齢で、両親の後を継いで農業を行っているのは末子の4男であり、野菜の栽培が中心である。

また、この長男の娘も愛知県に来ていて、愛知県人と結婚したので、日本に定住することになるであろうという。

A. F. 氏自身は去年カナダのトロントに住むおばを訪問しており、これからはこの3国間で交流していこうと話し合っているという。その際の言葉は日本語で、ブラジル在住の先述の長男もまたその子供たちも日本語を話すそうである。これはそれなりの努力があつてのことであろうことは言うまでもない。

以上のように、A. F. 氏のブラジルとの交流の主な相手はいとこ達であり、全体的には、こうした親戚同士の交流のケースの方が、家族構成員同士の場合よりもずっと多いと言えよう。

また、以上みたケースのように、こうした親戚のうちの誰かが日本に出稼ぎに来ているような場合は、両者の関係や交流はより一層深まっているようである。

#### 第IV章 考 察

最後に、以上見てきた移住と交流の展開の中に見られる2～3の問題点について考えてみたい。

第1は、以上見た“交流”の性格についてである。ここで見られた交流は、家族あるいは親戚などいわば血縁関係者が双方に居住していて、これらの人々を中心とした“国際交流”が中心となっており、こうした交流を“国際交流”としてどう考えたらいのかという問題である。

確かに、国際交流と言えは血縁関係などはないのが普通であろう。しかし、こうした関係が存在する事は、国際交流一般という点からみても、きわめて有利な条件が存在するということではなかろうか。また、当事者同士は、家族や親戚同士の交流と考えているとしても、これが客観的には、“国際交流”の側面を持っていることも確かであり、両国文化の違いなど他の者が学ぶことのできない諸々の事柄を、当事者同士は学びあっているのである。要するに、“国際交流”のきわめて有利な条件が坊津には存在するということになるだろう。

考えてみたい、第2の問題点は、こうした交流の坊津町や地域の側にとって持つ意味についてである。

1983年、日本からの最初のブラジル訪問団が帰国したあと、「坊津町ではブラジルふるさと会」が結成されたが、これはブラジルとの交流が坊津町の発展にとってもプラスになると考えたからであろう。この訪問団の参加者は、ブラジルで生活する町出身者たちとの交流によって、自分自身の

変革を経験したのではなかろうか。そして、より多くの者がこうした経験をするにより、町全体の発展もありうると思ったのではないか。

こうして、「ブラジルふるさと会」が結成され、その活動が開始されたのである。

以上のように、ブラジルに住む町出身者との交流は、人口流出、過疎化に悩む坊津町の発展にとっても大きな可能性を与える一条件となっていると言えよう。

第3の問題は、交流の将来についてである。坊津町が行っている血縁者を軸とした以上のような交流は、交流の世代が1世から2世、3世と移るにつれて、だんだん薄れ、やがては消滅していくのではないかという不安が持たれていることについてである。

確かに2・3世との交流は、日本でも共に生活したことのある1世との交流と比べれば、直接的な“親密さ”のようなものは薄れるであろう。しかし、在伯出身者のルーツが消失することはないのであり、従って、関係を継続しうる条件は永遠に変わらない。

そして、こうした条件を生かすことのメリットも存在し続けるであろう。文化に違いがあれば、互いに学びあえるはずだからである。

確かに、交流の形態は少しずつ変わってゆくのであろうが、両者の交流自体はずっと将来まで続くであろうし、ブラジルの場合には、先住民であるドイツ系移民やイタリア系移民の本国との交流のケースがその手本を示していると言えよう。

## 謝 辞

本研究を進めるに当たり、岩田毅史氏をはじめとした町役場企画課の方々には、役場関係の窓口となり、様々なご協力をしていただいた。また、総務課の藤井泉氏にも町報の件で度々お世話になった。

さらに、谷上幸男町長、ふるさと会副会長の長浜寿氏、佐藤順二氏、鮫島一誠氏には、移住や交流に関する様々な情報を得た。また、十名以上のふるさと会員からは個別の話を伺った。

とくに、長浜寿氏には、貴重な資料の貸与をはじめ細部に亘る親切なご協力を得た。

以上の方々に厚く御礼申し上げます。

## 注

- 1) 藤崎康夫 (1978) : ブラジルに一番近い町・坊津. 文芸春秋 56巻 12号 P410~422.
- 2) 拙稿 (1997) : 奄美とブラジル移民. 鹿児島大学教育学部研究紀要 48巻 P15~33.
- 3) 斉藤広志 (1984) : ブラジル人と日本人. サイマル出版会
- 4) このうち9名の方々の話については学生のレポートとして別にまとめられている。
- 5) 集中調査前に2回、後に4回、役場、非調査者個人などを訪問面会した。
- 6) イギリスの筆者の留学した大学などでは、かつての人文地理学は今や「空間社会科学」とでも言うべき方向に変わってきている。
- 7) 坊津町郷土史, 下巻 (1972) P333~334.

- 8) 前掲注7) P 335.
- 9) 1955年の町制施行以前は坊津町ではないが、それ以前も現坊津町の範囲を意味する。すなわち、1889年(明治22年)からは西南方村、1953年からは坊津村である。
- 10) この名簿は後掲注11)の中に転載されている。なお、原本池田重二(1941):『躍進』のサブタイトルは鹿児島県人ブラジル移植民史であると思われ、本書が帝国和漢図書目録に収められていることを確認しているが、実物については筆者未見である。
- 11) 鹿児島県海外協会(1965)、鹿児島県海外移住者名簿
- 12) ただし、戦後の資料は1962~64年に鹿児島県海外協会が在伯県人会や県下市町村に対して協力を求めて資料を収集整理したもので、後記にも「これは数万人と推定される在外県人の極く一部に過ぎませんが…」とあり、必ずしも十分なものではない。
- 13) なお単身者の年齢では10代が最も多く20代まで含めると9割に達するが、50代も1人含まれていた。
- 14) 戦後移住者については、移住後間もないことや資料の整理も異なるのでここには含めていない。この資料に掲載されている戦後移住者の総数は、自費渡航者も含めて合計12世帯である。
- 15) 白石蜜義(1971):在伯鹿児島県人発展史 非売品
- 16) 名簿のみの部分にも(総世帯数)297世帯の中で21の坊津出身者の世帯があったが、職業等の資料が欠落しているので、この部分は筆者の整理の中には含めなかった。
- 17) 半田知雄(1970):移民の生活の歴史—ブラジル日系人の歩んだ道—サンパウロ人文科学研究所
- 18) 町報ぼうのつ 135号(1967年8月号) P 4
- 19) 熊本県人会創立30周年の行事である。
- 20) 鹿児島県人会創立80周年の行事である。
- 21) 彼女が熊本県人の行事で渡伯した際、熊本テレビが同行し、彼女の50年ぶりの母親との再会等取材したが、その際熊本テレビが捉えたブラジル人の日本人観で、「日本人は仕事にのみ追われていて死に向かって行進しているようだ」、「外国人をよく理解すべきだ」などの意見は、ブラジル人の方から日本人を見た場合の見方として、興味深い。
- 22) コーヒー、清涼飲料水、ビール、酒などを供する立ち飲み屋で、簡単なつまみ物があり、食事を出す所もある。前山隆編著(1996):ドナ・マルガリータ・渡辺—移民・老人福祉の五十三年—お茶の水書房 P 197.
- 23) S. T.氏は不在であった。この聴き取りは氏の奥さんからである。
- 24) 一般に日系人は自分達以外をこう呼んでいる。